

おじさんの青春日記 ～その4～

オ
ペ
ラ
夕
鶴

「やあ、久しぶりですねえ」
ホテルのロビーで声をかけられた。

数年ぶりに出会う、旧知の雑誌編集者だった。

彼の後に眼鏡をかけた老人が二人の立ち話が終わるのを待って、手持ち無沙汰にたたずんでいる。

「そうそう、音楽、お好きでしたよね」

と、編集者。

「ええ、そうですよ」

「ちよつどいい。めずらしい方をご紹介しますよ」

編集者はそう言って、老人に歩み寄って何事かささやいた。老人が鷹揚にうなずくのが見えた。

「こちらは、作曲家の団伊玖磨先生。ご存じですよ。今、私の雑誌に随筆の連載をお願いしてるんですよ」

と編集者が、その老人を私に紹介した。

作曲家、団伊玖磨。

知らぬはずがない。

ちよつど昼どきということもあって、編集者に誘われるままホテルのレストランで昼食を一緒に、ということになった。

中学生の頃から私は、父の遺品のポータブルのステレオセットで毎日深夜までレコードを聞きあさっていた。ドーナツ盤と呼ばれていたドーナツの形をしたレコード。三十センチほどもあるLP。それぞれレコードの回転数が異なっていて、プレイヤーの先端についたダイヤモンドの針から音を拾うものだった。

父が死の直前まで枕もとから離さなかった箏曲「千鳥」、「春の海」、「瀬音」など宮城道夫の箏曲全集。姉たちのコレクションであるポールアンカ、ナットキングコール、ハリベラフオンテなどの歌。ペレス・ブラドやグレンミラーなどのバンド曲。カーメンキャバレットの流麗なピアノ。そして石原裕次郎、バツハ、ブラームス。手あたり次第にさまざまなジャンルの音楽を深夜まで聴きふけていた。

その時代、音楽大学を出たての指揮者、小沢征爾さんが世界の音楽界に華々しくデビューしていた頃。日本から単身スクーターを駆って陸路フランスにたどり着き、ブザンソンの国際指揮者コンクールでグランプリを獲得するまでの小沢氏の冒険記、「僕の音楽武者修業」という本を私は快哉を叫びながら何度も読み返していた。

高校生になったある日、学校帰りに寄り道したレコード店で見つけたオペラ「夕鶴」のレコードがどうしても欲しくなつて、母にねだつて買ってもらった。

のどかだった当時。私が学校帰りに通っていたレコード店は、店員さんに頼めば重厚なデザインのもの、見るからに高級そうな店内の舶来アンプとスピーカーでレコードを長いあいだ聴かせてくれていた。時によるといかに年季の入った趣味人という感じの店主が店先に現れ、紅茶やお菓子すすめながらクラシック音楽の蘊蓄(うんちく)を長々と聞かせてくれることがあった。

演奏時間一時間五十分にもなる大曲、オペラ「夕鶴」はLPの二枚組になっていて、雪のなかにひっそりとたたずむ山間の小さな農家が厚手のジャケットにデザインされていた。

木下順二原作の戯曲「夕鶴」はストーリー、台詞ともに原作のまま、当時二十八歳、新進気鋭の作曲家、団伊玖磨によって曲がつけられ全一幕のオペラとして完成した。

一九五二年(昭和二十七年)、大阪・朝日会館で団伊玖磨みずからの指揮で初演されたオペラ「夕鶴」は、当時の音楽界にセンセーションをもたらした。

太平洋戦争での惨憺たる敗北、空襲によつて廃墟と化した日本の主要都市、進駐軍による占領統治など、日本国民全体があらゆる分野で心身喪失の状態にあった当時、ヨーロッパの古典翻訳オペラではなく、日本人作曲家による日本語によるオペラ「夕鶴」が当時の日本の多くの音楽愛好家に深い感動と勇気をもたらしたことは想像に余りある。

一九二四年（大正一三年）東京都に生まれた団伊玖磨は、東京音楽学校を卒業した直後から作曲家への道を進んだ。NHK専属の作曲家として劇音楽などの作曲にたずさわるとともに、団氏が世に出るきっかけとなった「交響曲第一番イ長調」などの大作の創作に意欲的に取り組んだ。

昭和二六年完成したオペラ「夕鶴」は数々の音楽賞を受賞し、初演から今日までの上演回数は五百回を超えている。団氏は作曲、指揮活動のほかに、目まぐるしく駆け巡る国内、国外への旅のなかで書かれた随筆集「パイプのけむり」の随筆家としても知られており、日本音楽界の長老として日本芸術院会員に列せられている。

「夕鶴」は民話「鶴の恩返し」をもとに、木下順二が戯曲化したものである。

山中の一軒家に「与ひょう」という青年がひとり住んでいた。あるとき、与ひょうが矢が刺さつて苦しんでいる鶴を助けたところ、幾日かして美しい女「つう」が女房にしてくれと与ひょうのもとにやつてくる。

つうは、与ひょうのために鶴の千羽織という世にも美しい布を織った。その布は町で売ると一枚十両もの値で売れた。

隣村の「惣ど」と「運ず」は、この千羽織でひと儲けしようと与ひょうをそそのかす。つうは何枚もの布を織らせ、それを都で千両で売ろうという魂胆だった。

つうは彼らに言いなりになる与ひょうに不安をつのらせながら、もう一枚だけ布を織るところにする。ただし、機（はた）を織るところは決してのぞき見しないように、と念押しして。

ところが与ひょうは誘惑に負けて、ついに機屋をのぞいてしまう。そこにはみずからの体の羽根を抜きながら一心に機を織る一羽の鶴がいた。

機屋から出てきたつうはすっかりやつれ、二枚の布を手にしている。一緒に都へ行こうと喜ぶ与ひょう。しかしつうは、一枚の布だけは与ひょうのもとに大切に残しておいて、と言いつつ空へ帰っていく。

団伊玖磨指揮による大阪での初演から十四年ののち、オペラ「夕鶴」のLPレコードを手に入れた高校生の私は、毎夜そのレコードを繰り返し、繰り返し聴きふけた。

主役の「つう」はソプラノの三宅春恵、「与ひょう」に木下保、「運ず」に立川澄人、「惣ど」に秋元雅一朗。東京フィルハーモニー交響楽団による管弦楽、作曲の団伊玖磨氏自身による指揮である。

荘重な冒頭の導入オーケストラのあとに、子供たちの歌う童歌（わらべうた）が聞こえてくる。

仲間にかされて、金への執着にとらわれていく与ひょうの姿を悲しむつうの歌うアリア『私の大事な与ひょう』。与ひょうへ思いを残しながら大空へ還るつうが、与ひょうに別れを告げる『別れのアリア』。

与ひよう、わたしの大事な与ひよう。あなたはどうしたの？
あなたはだんだん変わっていく。変わっていく。
わたしとは違う世界の人になっていってしまう。
いつかわたしを私を矢で射たような、あの恐ろしい人たちと
同じになっていってしまう。

どうしたの？ あなたは。どうすればいいの？ わたしは。
わたしは、わたしは、どうすればいいの？

あなたはわたしの命を助けてくれた。

何の報いも望まないで、矢を抜いてくれた。

それがほんとうにうれしかったから、わたしはあなたのところへきたのよ。
そして、あの布を織ってあげたら、あなたは子供のように喜んでくれた。

だから私は苦しいのに、何枚も何枚も織ってあげたのよ。

それをあなたはそのたびに、お金と取り替えてきたのね。

それでもいいわ、わたしは、あなたが好きなのなら。

だからお金が入ったから、あとはあなたと二人きりで

この小さな家のなかで、静かに、楽しく暮らしたいのよ。

あなたは他の人とはちがう人。わたしの世界の人。

なのにあんたは、だんだん離れていく。だんだん遠くなっていく。

どうしたの？ あなたは。どうすればいいの？ わたしは。

わたしは、わたしは、どうすればいいの？

アリア『わたしの大事な与ひよう』

日本語のセリフに従って曲づけされた歌曲の旋律は、歌詞と音律が相互に調和して、日本語のもつ独特の情感をいっそう際立たせていた。

日本中世の定型詩のような独特のリズムをもつ歌詞と、伝統的な和声とが渾然（こんぜん）となった雅びな響きが私の心をうつた。時代も判然としない幻想の時のなかで、なにか懐かしいものにめぐりあえたような安らぎがあった。

高校生の私はそれらの歌曲のほとんどを諳（そらん）じて歌えるほどになっていた。

日本の敗戦からの復活を高らかに謳う、東京オリンピックが開催された頃のことであった。

成長にしたがって私は、アサヒグラフに連載されていた随筆集「パイプのけむり」や、団伊玖磨氏の著作のいくつかを読むようになった。

団氏が四歳の時から書き続けられている「パイプのけむり」は氏の縦横無尽な博識と、国内外の旅で得た体験をつづる名エッセイといわれている。

しかし初期の著作はともかく、回を追えば九十年代近年の「パイプのけむり」の章にいたると、随所に大衆庶民を膝下に睥睨（へいげい）するような氏の貴族趣味的、権威主義的な匂いが読みとれて不快に感じるがあった。

日本芸術院会員として、また数代に遡（さかのぼ）る日本上流社会の一員として、海外に旅をすれば在外公館に駐在する大使が出迎え、旅先で手厚い保護を受ける。現地の高位、高官たちとのきらびやかな交際。いつころからか権威の衣をまとった創作活動を続けて、加齢とともに鋭角的な感性も前衛も減衰した音楽家の旅日記に私はほとんど興味を失ってしまった。

かつて、瑞々（みずみず）しい旋律で青年期の私をとらえて離さず、そのアリアを諳（そらん）じるほど心酔させた音楽家の叙情とオリジナリティを、その後の氏の曲や文章のなかに感じとることは出来なかった。

初演から五十年を経て今あらためて聴くオペラ「夕鶴」は、つうが与ひように歌いかけたアリアが象徴するように、私にとって今もなお輝きを失っていないばかりか、現代にあってもいっそう普遍の光を増しているように感じる。

さておき。

思いがけず団伊玖磨氏と昼食をとにもすることとなった私は、ホテルのレストランに入

た。私が氏の代表作であるオペラ「夕鶴」のファンであったことに加え、青年期に購入したそのレコードを今も大切に保存していることを聞いた老作曲家は大仰に驚いてみせ、食事のあいだじゅう終始上機嫌であった。

コーヒーが運ばれる頃、人間の運命ということに話題が移り、団氏は古いエピソードを披露してくれた。

「フィリピンの、或るリゾートホテルのプールサイドでの出来事なんです」

と氏は語り始めた。

「プールサイドのデッキチェアで私はウトウトうたた寝をしていましたねえ。そこへターバンを巻いたインド人が私の前を通りがかって、私の顔をじつと覗きこむんです。どうやら占い師のようなんです。」

『お前の父親がおじいさんは事故に遭って、血まみれになって死んでいったらう？』

『どうか、違うか？』

私は初めのうち、その占い師が言いがかりをつけて、私からチップでも掠め取ろうとしているんじゃないかって疑いました。

でもそのホテルはそれなりの格式のあるホテルでしてねえ。宿泊客以外の一般人が容易に入れるようなところじゃあない。

私の疑念を見透かしたのか、そのインド人は、『私は金をもらおうとしてお前にこんなことを言ってるんじゃない。私は金には興味はない』

と端然として言い放ちます。

そしてそのインド人は、

『お前も、血まみれになつて死んでいくだらう』

『つて、不吉なことを言うんです。要するに畳の上では死ねず、事故に遭って死ぬ、と私に向かつて予言するんですよ。』

『なぜ、そんなこと、言うんだ？』

『つて私は問い返しました。』

『おまえの顔にお前の未来が見える』

と、インド人。

私には心あたりがあつたんです。私の祖父は、昭和の初めに暴漢にピストルで射殺されているんです。血まみれになつて」。

一九三二年（昭和七年）三月、三井財閥の指導者である三井合名理事長、男爵、団琢磨（だん たくま）は東京日本橋・三井銀行本館前で血盟団員、菱沼五郎の放つた銃弾によつて射殺された。当時七五歳であつた。

第一次大戦後、大正から昭和へと元号の改まつた日本では未曾有の農村不況により、東北地方で娘を身売りするなど極貧の状況が続出した。金融大恐慌に続く労働争議の頻発と当局による弾圧、失業者の増大と左翼勢力の活動、そしてこの時代の国政を担うべき政治家たちによる疑獄事件が相次いだ。これらの社会背景が血盟団員を急速に過激な「国家革新」に向かわせた。

彼らは当時の国家指導者を「一人一殺」するテロ活動に臨んだのである。団琢磨が襲われた一月前には前大蔵大臣、井上準之助が同じく血盟団員、小沼正によつて射殺されている。

事件直後、世論はテロ活動を強く非難したが、事件の公判が始まつて被告たちの動機や経緯が次々に明らかになるにつれ、国民のあいだから被告たちへの同情と支持が澎湃（ほうはい）と沸き起こつた。

団琢磨暗殺事件ののち昭和七年五月一日、犬養毅首相が海軍士官に射殺されたいわゆる五・一五事件は、この血盟団事件の延長にある。

農村の疲弊、金融恐慌、不況、軍人の台頭、そしてファシズムが日本を近隣諸国領土への侵略に向かわせ、十余年後の破滅的な敗戦へと時代を刻んでいった。

その敗戦の六年後にして、団琢磨の孫、団伊玖磨によつて作曲されたオペラ「夕鶴」が発表されたのである。

団伊玖磨の父、団伊能は勅選の貴族院議員、戦後の参議院議員を経た財界人。

団家は三代にわたつて明治時代から現代に至るまで、日本の歴史の表舞台に深く関わり続けている。

ホテルのレストランで、団氏は続ける。

「私はそのインド人に私の祖父の遭難事件を話したんです。そうしたら彼は、

『俺はそんなこと、とうにわかつている』

とばかり、特別驚いた表情も見せません。

私は彼に言つたんです。

『君の予言はわかつた。でも私は血まみれになつて死ぬことなぞイヤだ。君が本当に予言する能力があるなら、どうすればそういう事態を避けることが出来るのか分かるだろう？。教えてくれないか、その手だてはないのか？』と。

そうしたら彼は、しばらく黙りこんだのち私に言いました。

『なにか赤いものを離さず身につけるのがよい。たとえば、ハンカチ、ネクタイ。なんでもいいから、赤色のものを肌身離さず身につけてさえいれば、お前は難を逃れることができる』

と言ひ残して、私の前から悠然と立ち去つたのです」

私と同席の編集者は思わず顔を見合わせて、団氏にそれから後のことを尋ねた。

「そのインド人に会つてからというもの、私はほらこの通り、赤い布切れをいつもポケットに忍ばせているんです」

と、団氏は白いワイシャツの胸ポケットからマッチ箱ほどの大きさの深紅のシルクの布を取り出して、私たち二人にかざしてみせた。

*

一人の音楽家の死を思い出す。

一九九一年（平成三年）春。私の執筆したノンフィクション作品「追録 ハリータケオモミタ」がテレビ局によって、ドキュメンタリー番組『世界一の国旗掲揚台を建てた男』として制作されることになり、私は現地ロケのためにテレビ局のクルーと共にアメリカ・カリフォルニア州へ渡ることになった。

一九〇八年（明治四十一年）、一人の移民者として日本からアメリカに渡り、戦前、戦中、戦後、幾多の辛苦を乗り越えて、アメリカ市民とともにカリフォルニア州カリパトリア市に世界一高いフラッグポール（国旗掲揚台）を建立した広島県出身の日本人、ハリータケオモミタこと榎田武雄。一九六〇年の建立の日から三十周年の記念すべき年を迎えようとしていた。

カリパトリア市長からの招請で、「国旗掲揚台建立三十周年式典」に参加することになった私に、友人の音楽家二人が手弁当で同行してくれることとなった。

ピアノストの的川幾子さん、ソプラノ歌手の味香友子さん。

その小さな町、カリパトリア市での記念コンサートで現地の人たちが用意してくれたピアノは西部開拓史時代の、ひどく音程の狂ったグランドピアノだった。

的川さんは現地の人たちが所望したピアノのソロ曲の演奏はさすがにためらったが、プッチーニのアリアからアンコールの「メモリー」まで、古ピアノにむかって玉のような汗をかきながら味香友子さんの伴奏を務めてくれた。

彼女の底抜けに明るく、子供のように純真な性格は、訪問する先々でアメリカ人の心をとらえ、周りに賑やかな人だかりを作った。

プロの演奏家の生の音楽に触れることはほとんどない、砂漠に囲まれた小さな町でのささやかなコンサートだったが、的川さんと味香さんの醸し出す音が聴衆の心に、まるで乾燥した土が慈雨を吸い込むように染み透っていく情景を私は目のあたりにした。

聴衆ひとりひとりが眼を輝かせて、彼女たちの音を必死で拾いとろうとしていた。

どのように巧みな修辞のスピーチも彼女たちの音楽の前には無力だった。

コンサートが終わり、ロサンゼルスのホテルで現地スタッフとの別れの会食の席上、的川さんの演奏に繰り返し賞賛を送りつつ別れを惜しむ現地スタッフの言葉に彼女は、

「こんなにみんなに喜んでもらえて、歓迎してもらえて、わたしも、死んでもいい。ほんとよ、今回みたいに幸せな気分ピアノが弾けたの、ほんとうに初めて。一生の幸せよ」と言い終えると、そのままテーブルに「ワー」と大声で泣き伏した。

的川さんの体調が急激に悪くなったのは、アメリカから帰国して間もない頃のことだった。

「（ワインの）ロゼのようなオシッコが続くんよ」

とゲラゲラ笑いながら私に話していた。

腎臓ガンであることを、しかも末期の状態であることを彼女は知っていた。

的川さんは伴奏ピアノストとして多くの声楽家を育て、世に送り出した。

彼女は歌手が最高の状態で、最良の条件で発声できるように驚くほどきめ細やかな気配りをしながら鍵盤に向かう。情緒の起伏の激しいわがままな歌手をなだめたり、励ましたり。オペラで主演する歌手は、初演の数ヶ月も前から彼女のピアノを頼りに練習を続け、初演の日、極度の緊張と不安を押し殺してオーケストラの待つ舞台へ一歩を踏み出していく。彼女は舞台の袖からボクシングのトレーナーのように、歌手の一挙手一投足を厳しく見つめる。スポットライトは常に歌手にあてられ、終演のあと彼女が花束を受け取ることは少ない。

コンサートの日程が決まると、彼女はオンボロの外車に乗って朝から晩まで駆けずりまわって、だれよりも多くのチケットを売り歩くのである。

「いい音楽を聞いても腹一杯にならんもんね。それが私らのつらいところなんよ。足で稼がんとね」と彼女はいつも話していた。

よほどの愛好家でない限り、古典音楽のコンサートチケットを望んで購入する者は少ない。まして無名の演奏者のコンサートを。

音楽家たちによって高度に錬磨された芸術は、権力と富の支えによってその文化を永らえてきた。中世の王侯貴族が現代の国家や企業に形を変えただけで、「腹の足しにならない」音楽は「腹満ち足りた」、しかし世の流れとともに転変する時々の富や権力の庇護を受けて育つ。しかしながらその恩恵を手にするのは、絶対基準によることなくほとんど曖昧（あいまい）に選別された、極めて少数の芸術家たちだけであると思う。

あらゆる分野の音楽が大衆のものとなった現代においても、日本における西洋古典音楽や邦楽の分野に根強く生きている、中世さながらの因習や伝統を奇異に感じることもある。

的川幾子さんは演奏活動のかたわら、世界の子供たちが広島に集まって「平和」をテーマに数ヶ月かけて議論しながら、台本執筆から振り付け、舞台の小道具まで手作りで仕上げていくミュージカル、「ピースチャイルド」の音楽監督を長年ボランティアとして務めていた。

一九八二年、英国人デービッド・ウォールカムによってアメリカで設立された非営利団体「ピースチャイルド財団」の思想が、このミュージカルの基本理念になっている。

広島に集まる子供たちはその親ですら戦争体験を持たない世代も多く、彼ら独自の切り口で真正面から「平和」を語り合い、その果実を舞台の上の踊りや音楽のなかに表現していった。それは十代の青年達にとっては苛酷で、驚くほど高度な作業であったが、公演を通してそれを成し遂げた青年たちはきわめて密度の高い経験を身につけて広島を離れた。

的川さんはミュージカルに出演するため長期間広島に滞在する海外の子供たちを自宅に預かり、寝食を共にしながら我が子のように連れ歩いた。

彼女には「国境」、「国籍」、という概念がほとんど無いようだった。的川さんは一九九一年六月、地元の新聞に次のような言葉を寄稿している。

「『受けるより与える』ことに喜びを感じている。ミュージカル『ピースチャイルド』実行委員の学生たちに昨年、今年と出会い、私は頭の下がる思いとともに、一人ずつの名前を声を大にして叫びたいほど感激している。

ピースチャイルドは、例えば、壊れやすいガラスのような地球を人々の手で守るには、そしてその地球に住む人々が戦争をなくし、いがみ合うのをやめて幸せに暮らすには一人一人がどのような意識を持てばよいのかなど、多くの討論を重ね、それらをまとめて自分たちの台



了

本を作り、ミュージカルにするのである。この公演を支えているのが、実行委員を務める広島市内の大学生たちなのだ。彼らなくして公演はできない。心の優しさと精神の強さを持ち合わせる子供たちの良き指導者でもある彼らは、礼儀正しく、明るく、愉快で、そのうえ『自分たちが人から何かをしてもらう』のではなく、『どれだけ人にしてあげられるか』に若い力をかけているのだ。

勉学の合間をぬって資料を作り、日程表を作成し、内外の子供たちの和をつくり、世話をし、運営基金を集め、労力を惜しみなく発揮している。

とかく自分さえ満足すれば、自分さえ不自由しなければ、と自己中心の人が多い今の社会のなかで、彼らのボランティア精神は若々しく、健全で、尊いものである。彼らと接する子供たちもきつと、その精神を受け継いでくれると思う。彼らと知り合えた私もまた幸せである

一九九一年六月二十七日 中国新聞

一九九四年夏の「ピースチャイルド94」公演。的川幾子さんは病室と往復しながら務めた、ピースチャイルドの舞台を車椅子に乗って見届けた。

終演ののち、彼女の死に近いことも知って、公演会場の出口に整然と整列して待つ出演者、スタッフたちの懸命に涙をこらえる拍手に送られた。彼女が長い音楽生活のなかで数多くは味わったことがない、万雷の、そして彼女が立ち去ったあとも響き続ける喝采であった。

病院にもどった彼女は病室の親族に、

「ああ、ひとつづつ肩の荷がおりていくみたいね」

と語り、その直後、息をひきとった。五十歳をわずかに超えたばかりの彼女は音楽を生涯の伴侶として過ごし、死を迎えるまで独身を通じた。

音楽の世界の頂点にあるといわれる人。無名のコンサートのチケットを売り歩く音楽家。世の評価はともかく、彼らが音楽に寄せる愛情と情熱は、双方、同量で相等しい。

音楽家たちの思いが蒼海のごとく深く、そして純粹であればあるほど、刹那の音に生きる彼らの後姿に切なさを感じるのはなぜなのだろうかと思う。